

柏木教会月報

4月号

東京都新宿区北新宿 3-1-18

☎03-3368-2156

牧師 大浦 勝

信じて命を受ける

ヨハネによる福音書二〇章一九～三一節

牧師 大浦 勝

これらのが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。(三一節)

復活されたキリストの手には、十字架に釘付けされた

時の釘跡が、わき腹には、兵士の一人が刺した槍の傷跡があつた。この福音書は特にこのことを強調している。

「手とわき腹とをお見せになった」(二〇節)。わたしたちのために十字架にかかる死に、墓に葬られたキリストが、死の力に打ち勝ち、墓の力を破って復活されたのである。復活されたのは、わたしたちのために救いのみわざを成し遂げられた(ヨハネ一九・三〇)。キリストである。このキリストがもはや死ぬことなく、世々限りなく生きておられるのであるから、わたしたちに与えられている神との交わりは、わたしたちが生きている間に限られるものではなく、わたしたちの死をもつても終わらない永遠の交わりである。「生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです」(ローマ一四・八)。

主の日の礼拝は、キリストの復活を記念するために定められた。週の初めの日、キリストは復活して弟子たちにこ自分を現し、こ自分が生きていることをお示しにな

った(一九節)。「八日の後、すなわち次の日曜日に、キリストは来て弟子たちの真ん中に立たれた(二六節)。教会はこれを覚え、記念して、日曜日を「主の日」と呼び、この日に礼拝をささげてきた。わたしたちはこの日にみ前に集い、礼拝をささげることによって、自分がもはや自分自身のものではなく、十字架と復活によって贖い取つてくださったキリストのものであることを言い表す。他のすべての日々、また、わたしたちの他のすべての活動は、ここから出発し、ここに帰つて来る。主の日の礼拝は、わたしたちの生活の中心であり、神の特別なみわざに対応する特別な時である。

弟子たちは復活のキリストを見て信じた。しかし、復活のキリストを信じる信仰にとって、「見る」ことは本質的なことではない。マグダラのマリアも、エマオの村へ向かっていた二人の弟子も、その目でキリストを見ながら、それがキリストだとは分からなかつた(ヨハネ二〇・一四、ルカ二四・一六)。むしろ、「見ないのに信じる人は、幸いである」(二九節)。わたしたちは見ないで信じる時を生きている。キリストは聖書を通してわたしたちに呼びかけ、こ自分を現し、こ自分が生きておられることをお示しくださる。わたしたちが信じて命を受けるためのみわざをおこなつてくださる。「神は、その独り子をお与えになつたほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ三・一六)。わたしたちは信仰によってキリストに結ばれ、キリストから永遠の命を受ける。キリストは聖書を通してわたしたちにその信仰を与えて下さる。